

■ 2024年度 入試問題分析シート ■

早稲田大学

社会科学部

科目	数学
----	----

総括

試験時間	60分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
満点(配点)	40点	分量(昨年比)	増加	昨年並	減少

<総論>

昨年の数式処理中心の問題セットとは異なり、図形の絡む問題を含む例年通りのセットであったが、微積分や確率の問題が見られないなど頻出分野が必ずしも出題されているわけではない。もっとも3題とも分野間の融合度が少ない点や、大問3題で小設問の総計12問という形式も例年とほぼ同様である。3大問中2題が典型問題で、全体としての難易度は昨年よりも若干易しい程度であり、昨年と同様に満点も十分可能である。近年の早大社会学はこのレベルで安定しているが、来年以降の対策としては、今年よりもやや難しいレベル(4年前のレベル)を早大社会学の標準レベルと想定して対策しておくといよい。「大問が3題、大問ごとに小設問が3問前後」という形式が定着している。

<特記事項・トピックス>

上に記したように頻出分野の確率や微積分の問題が出題されなかった。確率は2年連続で出題されていない。
 昨年まで2年連続で数学Bの範囲からの出題が見られなかったが、今年は3題中2題が数学Bの範囲の問題で、若干偏りが見られる。数年単位で全分野から万遍なく出題しようとしている感がある。
 図形に絡む問題が少なくとも1題は出題されるという傾向が復活した。

<合格への学習対策>

基本的、標準的な問題が中心であるとともに、整数問題や式の計算など、見慣れない数式を扱う問題もときには出題される。数年単位でみると数学IAⅡB全分野から出題されており、分野間の融合問題も含まれている。出題分野にヤマを張るのではなく、教科書を中心に据えて基礎を徹底し、標準的な問題集等による演習を全分野にわたって積んでおくのがよい。基本知識を定着させるとともに、計算処理力・思考力を鍛えておくことが大切である。全問記述式であることから結果に至る過程を大事にして学習することが肝要である。

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
1	記述	Ⅱ	図形と式	直線で囲まれる領域内を点 (x, y) が動くときの、 x と y の2変数1次関数の最大値を求める問題(いわゆる線型計画法の問題)である。教科書にも例題があるので考え方に迷うところはないだろう。丁寧に記述することがポイントである。	やや易
2	記述	B	ベクトル	3辺の長さが既知である三角形の内心と垂心のベクトルを、三角形の2辺をなすベクトルを用いて表す問題で、これも通常受験勉強をしていれば経験が積まれているはずの典型問題である。内心は、三角形の角の二等分線に関する定理を利用するとよい。垂心は内積=0の2式を連立させればよい。	標準
3	記述	B	数列	初項が正の数として与えられた、異なる n 項から成る単調増加数列の集合について、各項と初項との差及び各項と初項との比が、元の集合の要素になる数列を考察する問題。一見取っ付きにくいだが、 $n=3$ などとして実験してみると様子が見えてくるであろう。「相異なる」と「単調に増加する」数列であることに注意することが解答のポイントになる。対数をとれば「比」は「差」と同じである。	やや難

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を5段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。